
ナースのマル秘お仕事（エンジェル・ハンドシェイク）

カトラス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ナースのマル秘お仕事 エンジェル・ハンドシェイク

【Nコード】

N7283D

【作者名】

カトラス

【あらすじ】

子供の時から夢でもあり、憧れでもあるナースになった主人公、浅井いずみは青葉台総合病院の外科病棟で働いています。そんな、いずみに仕事のことである悩みごとがあります。春エロス2008参加作品です。

第一話 いずみは新米ナース（前書き）

春エロス2008で検索すると、他のエロ、いやエロスな作品が読めるかも……

汚れ作家、我が弟でもある、ごはんライスに捧げる。

春エロスの参加規程に18禁にならないギリギリのエロスを表現するとなっておりますが、たぶん、無理かもです。その時はその時で笑ってやってください。

おお、我が弟よ、病院のベットで兄を応援してくれたまえ（作者アホの為、スルーしてください）

好きな方どうぞ！

この作品は、病院が舞台でナースが主人公でございます。

完全なる作者の想像の産物であり、作品の内容には、不快を抱かれる方もおられます。

内容に書かれていることは実際に存在しないフィクションでございます。

第一話 いずみは新米ナース

みなさん、はじめまして！ あたし、浅井いずみっていいいます。歳は今年で、二十二歳になります。

で、仕事はナースをしています。

世間でいうところの白衣の天使ってやつです。

病院に配属されたばかりの新米ナースなんですよ。

職場は都内にある、青葉台総合病院の外科病棟三階ナースステーションでお仕事がんばっています。

子供の時から夢だったのですよね、看護婦さん。

それで、高校を卒業してから、すぐに看護学校に入っちゃいました。夢に向かってがんばるぞ！って感じ。

高校の先生に「進路どうするんだ、いずみ」って聞かれたときも、いずみはナースになるのって先生に宣言したぐらいですもん。

でも、友達とかは、いずみがナースになることに、凄く心配してくれたの。

周りが言うには、「いずみはドン臭いから、むかないんじゃない」かって。

そうなのですよ！ 自分で言うのは何なんだけど、いずみって凄く不器用なんです。

それって、ナースのお仕事するのには、致命的なんですよね。

だって、みなさんだって、注射打ってもらった時に、ブルブル手先が震えた看護婦さんに腕先出すの嫌でしょう。

でも、いずみはブルブル震える看護婦なんです。

ドジで不器用ないずみなのですけど、男性患者さんには、結構人氣あるのですよ！

「いずみちゃんってカワイイね」って言うてくださる患者さんもおられるし、からだの方治ったら「食事でも行こうよ！」って誘ってくださる患者さんもいるのですよ。

こないだなんかあ、血圧採ってるだけで「いずみちゃん、癒される」って褒めていただいたんですよ。

癒されるって、いずみにとっては最高に嬉しい言葉なのです。患者さんから、そんな、言葉いただくと、ああ、いずみは、ほんと、ナースになって良かったって思っちゃいます。

そもそも、いずみがナースになろうと思ったのも、子供の時に風邪をこじらしちゃって入院したのがきっかけなんです。その時にいずみの担当だった看護婦さんが物凄く優しく、いい人だったのです。仕事もテキパキとこなされていて、子供心にかっこいいなあって憧れたのですね。

で、それからというものの、どうしたらナースになれるか自分なりに調べたりしたのですよ。

結果、ナースになるのって、大変だということが分かったのです。ナースになるには、いろいろな方法があるのですが、一番ポピュラーな方法が、四年間みっちり看護学校で勉強して、国家試験に合格するってものなんですよ。かくゆう、いずみもその方法でナースになったわけなんです。

今から思っても国家試験緊張しましたね。

だって、看護学校を卒業する時には、すでに、現在の職場、青葉台総合病院の就職が内定していたのですよ。住むところも決めていたし、全てが国試に合格することが前提で物事が進んでいくのですね。

だから、二月に行われた国家試験はもの凄いプレッシャーでした。その月だけ生理が止まったぐらいですもん。

でも、無事合格して、今の職場にいるいずみにとってはいい思い出になっています。

こうして、念願でもあり、憧れのナースになったいずみなのですが、今、悩み事があるのです。

あ、誤解しないでくださいね。

先輩ナースにいじめられるとか、病棟のお医者さんにセクハラされるとか、そういったものじゃないのです。職場の同僚はとても、いい人ばかりなのですよ、ほんとに！

それと、恋人が出来ないとかとも違うのです。

だって、今は彼氏を作る余裕なんて、全然ないですよ。しいて言えば、仕事が恋人つてところです。

ちよつと、それだったら寂しいですかね。じゃ、何なんだったつこみ入れられちゃいますよね。

告白しますね。

実は、いずみの悩み事とは……

ある患者さんの事なんです。

その、いずみの悩みの種でもある患者さんは、三日前に救急車で、早朝に病院に搬送されてきました。

症状は腹痛でした。

正確に言いますと右下腹部痛です。

すぐに内科で腹部エコーとCTスキャン、それと血液検査が行われまして、白血球の数値が高いことから虫垂炎と診断されたのですね。盲腸のことです。

それで、手術が必要かも知れないということなので、外科病棟に移動されてきました。

ちようど、その日は、いずみは日勤の日だったので、内科病棟から外科病棟まで、その患者さんの移動を手伝ったのです。

初めて、その患者さんを見たとき、いずみは衝撃が走りました。

患者さんは、知ってる方だったのです。

その患者さんのお名前は、里崎 真治さんといって、いずみの中学からの同級生だったのです。

しかも、いずみの……

初恋の人です。はつきりって、いまでも、時々、夢に出てくるくらいの人なのです。

第一話 いずみは新米ナース（後書き）

読まれた方 ありがとうございます。

今後、お叱りを受ける展開になっていくかと、思います。 春工口
入規定変更により2話まで投稿OKとなっておりまして、3月2
0日までに、出来たら投稿したいと思っております。それ以降は3
月20日以降になります。おそらく、あまりひっぱれるものでは無
いと思うので1万文字ぐらいになるかと。
読んでくださった方ありがとうございます。

第二話 いずみの揺れる思い（前書き）

だんだんと書いていて、やばいかもと思ってまいりました。サッカーで例えたら今回はイエローカードかもです。タイトルだけでイエローカードだろうと言っ声もありますが…… こうなったら、気楽に行くことにします。

第二話 いずみの揺れる思い

いずみの初恋の人、里崎真治くん。

高校の時はサッカー部でがんばっていた真治くん。

いつも、明るい性格で、クラスの人気者だった真治くん。

いずみの片思いの人、真治くん。

意気地なしのいずみが、思いをつたえられなかった真治くん。

夢の中では、恋人同士の真治くん。

三日前に盲腸で青葉台病院に搬送されてきた真治くん。

いずみは、その日以来、頭の中にあるのは真治くんのことばかりなのです！

ナースの世界では、患者さんに恋をするのはご法度です。患者さんは、常に平等なんですよね。

でも、でも…… いずみの頭の中には、夢の中での恋人同士の真治くんがいるのですよ。

ああ、どうしよう。ナース失格ですよ。

ナースの仕事中也真治くんのことばかり考えています。ただでさえ、ドジないずみですから、考えごとばかりしているとミスの連発なんですよ！ 命を携わってる仕事ですから、ミスは許されないです。さつきも、患者さんの床ずれ直しにいくの忘れてしまって、先輩に大目玉でした。

「何い、いずみ。ぼつとしてるのよ？ もっと集中して仕事しなさい」って怒られちゃいました。

自分でもわかってはいるのですよ、こんなんじゃダメだって！ でも、仕事の合間を見つけては、担当でもない真治くんの病室を覗き見しちゃったりしてしまいます。

良いことなのか、悪いことなのかわからないですが、真治くんは、いずみの存在を全く気づいていないです。いずみ自身も気がついて

いない事に安心したりもするのですが、心のどこかで、気づいてほしいって願望もあるのですよ。

「いずみじゃないかよ！ 偶然だなあ。看護婦さんだったのか？ 白衣似合ってるよ！ おまえ感じ変わったよな。可愛くなったよな」とか、言われてみたい衝動があるのですよ。

いずみってバカですよ。自分で何いつてるのかわからなくなっています。

あ、それで、真治くんの体の状態なんですけど、搬送されてきた時に比べると、腹痛はだいぶおさまってきているらしいです。正確なことは担当じゃないので、わかりにくいんですけど、毎朝、患者さんの今後の治療方針を、お医者さんとナースで相談するカンファレンスで言っていました。

一般的に盲腸の患者さんの場合は、腸内にある虫垂を切除するのです。手術で外科的手法をとれば、すぐに治る病気なのです。でも、真治くんの場合は、最初の内科医の先生が白血球の数値を見て、手術して虫垂切除するまでのレベルではないと判断されていたので、セファテムという薬で治療されています。この投薬治療で効果がなかったら手術するという方針なのです。

いずみは個人的には、お腹が痛いのだったら、早く切ってあげた方がいいのになあって思っています。でも、医者の意見は絶対なので、そんな事とも言えないんですけどね。ましてや、いずみみたいな新米ナースの意見なんかはスルーなんですけど。

外科病棟に運ばれてから二日間ずっと投薬治療されていた真治くんなんですけど、昨日の血液検査の結果で手術されるか判断されません。

そして、今朝行われるカンファレンスで切るか切らないか判断されるのです。

「いずみ、ちょっと話があります」夜勤者からの引継ぎを聞いてい

たら、突然、婦長さんに呼ばれました。

何か、またミスしたのかな？ と不安になります。

「突然で悪いのだけど、患者さんの担当替えます。いずみ、理由はわかってるでしょう。あなた昨日、患者さんの床ずれ直すの忘れていたでしょう。患者さんが怒って担当替えてくれって言ってきたのよ！」

いずみは婦長さんの「担当替えてくれ」という言葉で頭が真っ白になりました。

気がつくまで泣いていました。

「いずみ、泣くんじゃないの。泣いてる場合があったら、患者さんに謝ってきなさい」

婦長さんの言う通りなんですよね。

泣いてる間があったら、迷惑かけた患者さんに謝らないといけません。

でも、涙が止まりませんよ。だって、だって、いずみが患者さんに悪いことしたと思うと、自分のふがいなさに悔しくて、悲しくてもう自己嫌悪でいっぱいなんです。

急いで、患者さんに謝りに行かないと……走って病室に行こうとしたら、

「いずみ！ 患者さんには私が謝っておいたから、謝りにいくのは涙が止まってからにきなさい。泣いて患者さんのところにいったらますます迷惑になるでしょう。で、担当替えの件なのですけど、あなたは、新たに里崎真治さんの担当してちょうだい。今度は変えてくれて言われないように、しっかりするのよ」

またまた、婦長さんの言った事で頭が真っ白になりました。

「里崎真治さんの担当して」の言葉に……

「いずみ、聞いているの？ 何豆鉄砲くらったみたいな顔してるのよ！ さあ、そろそろカンファレンス室に行くわよ」

真治くんの担当…… どうしよう。悲しいような、嬉しいような感情が複雑にからみあってきます。

思い切って、今、婦長さんに言った方がいいのかな？ 実は里崎真治さんは、いずみの同級生で、初恋の人であって、毎日、毎日、仕事の手につかないくらい好きな人であってして、そのために患者さんの床ずれ直すの忘れてしまったってえ。ダメダメ、そんな事、とても婦長さんに言えっこないよ。

ほんと、どうしよう。マジ、やばい感じなのです。

「いずみ、何い、放心状態になってるの？ しっかりしなさいよ。先にカンファレンス室にいつて、カルテ用意しときなさいよ」

それからまもなくして、不安な気持ちでいっぱいはいずみの気持ちなど関係なくカンファレンスが始まりました。

「え、次の患者さん、里崎真治さん。思ったより数値が悪いので、明日の昼から虫垂切除の手術を行います。

担当は浅井さんでしたね。私からも話しますけど、浅井ナースからも、患者さんに手術のこと、伝えておいてください。それと、手術前準備もしっかりお願いしますね」

やっぱり、真治くん、手術しちゃうんだ。何気なく、そんな事思っていました。

手術前準備もしっかりやらないと、また婦長さんに怒られちゃうな。ところで、手術前準備って、何するのだっけ？ ああ、やばいよ、やばい。

手術前準備って、剃毛しないといけないじゃないのよ！

そうなのでした、外科手術をする前には、毛髪からの感染を防ぐために毛髪を剃らないといけないのですよ。盲腸の手術の場合は下腹部に当たるので、陰毛を剃らないといけないのです。

そして、万が一にも、剃毛するときには男性患者さんが勃起されてしまったときは、ナースが射精をうながしてあげないといけないのです。

つづく。

第二話 いずみの揺れる思い（後書き）

次の更新は3月20日以降になります。

タイトル通りの展開になりつつありますが、おちはつけます。あくまで、削除されなかったらですけど（笑）
次回は、いずみのバイタルチェックがサブタイトルです。

第三話 いずみのバイタルチェック

それから、ほどなくしてカンファレンスは終わりました。

いずみの頭の中は、益々、真治君のことでいっぱいなんです。

ああ、どうしよう……術前準備、それに、万が一、万が一に真治君が……

なんで、こうなっちゃうのだろう？

そんなことばかりが、頭の中で堂々巡りしているんですよ。

「いずみ、何い、ぼつとしてるの。里崎さんのバイタル採ってきてちょうだい。それと、明日の手術のこと、伝えておいてよ！ 里崎さんは、あなたの患者さんになったのですからね」

きつと、はたから見たら、ぼつとしてるように見えちゃうのでしようね。先輩ナースの翔子さんに注意されてしまいました。

翔子先輩は、いずみより、歳が5つ上なんです。

配属されてから、ずっといずみの面倒を見てくださいます。

婦長さんから、いずみの面倒を見るように言われてるエルダーさんなのです。婦長さんからは、何でも分からない事があつたり、悩み事があつたらエルダーの翔子さんに相談しなさいって言われてます。

だから、今回の真治君の事を相談してもいいのですが……正直迷ってます。

何故、迷ってるかといいますと、翔子先輩には、普段から迷惑ばかりかけているからなんです。

いずみって、ドン臭いですから、しょっちゅうミスばかりなんです。そのたびに翔子先輩は庇ってくれたり、代わりに謝ってくれたりしてくださるのですよ。それで、ただでさえ忙しい翔子先輩のナースの仕事に支障をきたしてるのが現状なんです。

「いずみ、いずみ、聞いているの？ 分かったのだったら返事しなさ

い」

「はい、先輩。すぐにバイタル行ってきます」

やっぱり、相談は無理っぽいですね。

翔子先輩は、仕事が手一杯でいずみの相談を聞いてる時間などなさそうです。

早く、真治君のバイタルとりにはいかないと、また注意されそうです。

あ、バイタルっていうのは、患者さんの体温、脈拍、それと血圧を測定するんですね。患者さんの顔色とか見たり、軽く患者さんとお話しをして体調の変化が無いかわかるのも含まれます。些細な患者さんの変化を見極めてこそ一人前のナースなんです。このバイタルチェックはいずみ達の病院では、一日二回、朝と夕方に行います。

ナースにとつては重大な仕事のひとつなんですよ。

朝のバイタルチェックは、まだ寝ておられる患者さんもあるので、起こしてさしあげることから始まることです。今、時計は朝の九時を少しまわったところ、普段はカンファレンスが行われる前にするのですが、担当が代わった事もあって真治君のだけまだチェックできてないのです。だから、翔子先輩も早く行きなさいと注意したんだと思います。

真治君は、まだ寝ているのかな？ いずみが起こしてあげるのかしら。

真治君の病室の前まできたら、いずみは緊張でドキドキしてきました。

真治君はいずみの事、覚えているのかな？

緊張のあまり、左手に持つてる血圧測定器が震えています。

いずみ、ナースとして、真治君にいいところ見せるのよ！ と自分に言い聞かせて病室の扉を開けます。

「おはようございまーす」

扉をあけるなり、病室全体に聞こえるようにあいさつします。

真治君のいる病室は四人部屋なんです。部屋の中は、患者さん一人一人カーテンで区切られています。

真治君のベッドは扉側の右手前です。

いずみはカーテンを開けます。真治君寝ているのかな？

「里崎さん、おはようございまーす」

いずみの予想とは違って、真治君は起きておられました。サツカの雑誌を寝転びながら読んでおられます。いずみがいきなりカーテンを開けたので、きょとした表情でこっちに視線を合わせられました。

「ああ、看護婦さん、おはよう。いつもの人と違うね」

「あ、申しおくれました。わたし、浅井いずみっています。今日から、里崎さんの担当させていただきます」

いずみ、やつちやいました。

緊張のあまりに早口になってしまい、わたしをわたしと言ってしまいました。

「へえ、浅井いずみさんっていうんだ、面白い看護婦さんだね。もしかして……新人さんなの？」

え、なんで、真治君、いずみが新米ナースだと分かっているんだろ？　と思っていたら。

「看護婦さん、なんか、ガチガチだよ！　大丈夫ですか？」

「ええ、大丈夫ですよ。ごめんなさい。さとじゃきちゃん、体温測りましようか」

あ、また、やってしまいました。うまく舌が回らないです。

「看護婦さん、何があつたかしらなんですけど……あんまり緊張しなくていいですし、笑わせないでくださいよ！　またお腹が痛くなるじゃないですか」

だめだ、ダメ。いずみ、冷静になるんだ。

「ごめんなさい、里崎さん。いずみ……じゃなかった、わたし、まだ新人でして慣れてないんですよ。とりあえず、体温計、脇に挟んで置いてもらいますか」

「はい。で、俺って、手術とかするの？」

「そうだ、そうだ、明日の手術の話もしたかないといけなかったんだ。」

「そうなんですよ、里崎さん。後で担当医の先生からも、話があるのですけど、明日の昼に盲腸の手術なんですよ」

「え、やっぱり、切ってしまうんだ」

「あ、でも、切ってしまえば、盲腸の場合すぐによくなりますよ」

「そうなんだ。だったらしょうがないか」

「そう言って、真治君は笑っています。」

「それと、里崎さん、今日の夕食後から、胃の中に物を入れないように注意してくださいね。ちよつと、辛いかもしれないですけど、明日の朝食も食べられませんので」

「はい、わかりましたよ、新米ナースさん」

よし、何とか伝達事項はクリア出来たぞ。後は、脈と血圧だけ採ってしまつて、早くこの緊張から解放されたいです。

「それじゃ、里崎さん、血圧測らせてくださいね。右腕だけでもええますか」

真治君に腕を出してもらつて、いずみは血圧を測りはじめました。血圧を測つてる最中に真治君はいずみの顔をずっと見つめていました。そして……ついに……

「看護婦さん、どつかで見たことあるんだよね？ どこだろう。うん？ あああ、思い出した！」

それは、真治君にいずみが高校の時の同級生だと分かった瞬間でした。

「浅井いずみって…… なあなあ。俺のこと覚えている？ 高校の時、同じクラスだった真治だよ、真治」

いずみの血圧は測定不能になりそうです。どうしよう？ どう誤魔化そうか。

「そついえば、お前、高校の時の卒業文集にナースになりたいって書いていたよなあ！ そつか夢が叶つてナースになったんだ。よか

「つたなあ、いずみ！」

「だめです、完全にはれてしまいました。」

「あああ、真治君だあ！　こんな偶然ってあるんだね」

「なんてえ、白々しいのだと、いずみは自己嫌悪に陥りそうです。」

「ところでさあ、ちよつと聞きにくい事なんだけど……俺、手術するんだよな。で……同級生のよしみで聞きたいのだけど」

「真治君は、なんだかわからないんですけど、もぐもぐし始めました。嫌な予感です。」

「盲腸の手術って、アンダーヘアっていつのか？　下の毛剃るんだよな」

「予感が当たってしまいました。」

「うん。剃るよ！」

「いずみは、少しでも真治君にストレスを感じてもらわないように、冗談めいてそう言いました。」

「やつぱり、そうなんだ！　で……看護婦さんが剃るのだよな？　誰がそれ、するの？」

「それは……担当の看護婦がすることになっているのよ」

「……ってことは、俺の担当はいずみじゃないかよ！　いずみが剃るのかよ？」

「うん、いずみが剃る。ダメ？」

「……」

「真治君は黙っていました。しばしの沈黙の後。」

「いいよ、知らない人にされるより、いずみでいいよ。でも。間違っても……斬らないでくれよ！」

「うん、わかった。いずみ、がんばるから」

それから、数分間、気まずい雰囲気が二人をつつみ込みました。

なんとか、バイタルチェックが終わったがいずみは、ナースステーションに逃げ帰るように戻ったのですが、

案の定、その日の仕事は何をしてるのか、うわの空状態になってし

まいりました。

日勤の仕事が終わったはずみは、ナースの寮に戻る前にコンビニに立ち寄っています。

コンビニに寄った理由は、プレシユープ製品と剃刀にローションパウダーを購入する為なんです。あと、バナナをひと房買いました。そうなんです。寮に帰ってから、はずみは練習をするつもりです。真治君の為に、練習を……

つづく。

第四話 いずみの淫らな思い (Play with oneself PART

いずみは、青葉台総合病院に隣接する看護女子寮に住んでいます。職場の外科病棟から歩いて10分ぐらいの距離に寮はあるのですよ。

やっぱり、職場から近いってのは魅力の一つですね。ナースの仕事って、いずみが思っていた以上にハードなので住んでるところが近いのは非常に助かります。

寮は最近改装されたばかりで、全室個室なんです。間取りは1LDKですね。

翔子先輩からは、「いずみは恵まれている」って、ことあるごとに言われます。

翔子先輩が寮生活していた時は二人部屋だったそうなんですよ。

あ、そうそう、家賃もむちゃくちゃ安いのですよ！

この近所の家賃相場の半額ぐらいじゃないでしょうか。給料から天引きなので、無駄遣いしちゃうっても安心なんです。

あと、寮には食堂があつて、自分で料理する手間が省けて嬉しいです。

とくに今日みたいに、神経使いすぎてヘトヘトになった日なんかは、もう寮に帰るだけで精一杯って感じですね。

ふう、なんだかあ……今日はホントに疲れてしまいました。

仕事してる時は緊張しているので、あまり感じないんですけど、寮に戻ってきて自室でのんびりしていると、どっと緊張の糸がほどけてしまつてヘナヘナになっちゃいます。

今日はなんだか食事も喉を通らない気がするので食堂に行くのもやめようと思ってます。

いずみは、今、リビングのちょっと軟らかめのソファに埋もれながら、ぼっとテレビを見ています。

ソファの前にある小さめのテーブルには、さつきコンビ二で買った剃刀とプレシユープにローション、そして……バナナが置いてあります。

テレビではバラエティー番組をしているのですが、とても笑えるような気分じゃないです。いずみの頭の中は明日の術前準備のことです。テーブルの上に置いてある剃毛道具がいずみの心を煽ります。

「いずみでいいよ！でも……間違っても斬らないでくれよ！」
バイタルチェックで真治君が言ってくれた言葉が耳から離れません。

うん、真治君。いずみ、がんばるからね。

いずみの負けそうな心に、もう一人の自分が心の中でエールを送っています。

とにかく、いずみは負けないぞ！お風呂に入ってから自分の毛で練習するつもりです。

剃毛は看護学校の実習で教えてもらったこともありますし、実際の患者さんでしたこともあるのですが、成人男性の剃毛をするのは始めてなんです。ましてや、初恋の人で今でも大好きな男の人の毛を剃ることになるなんて思ってもいませんでしたし……熱がでそうですよ。

そろそろ、沸かしていたお風呂でも入ることにします。

脱衣場で下着になって気がついたんですが、いずみのパンティーは少しシミがついていました。

きつときつと、真治君のことばかり考えていたから濡れちゃったみたいです。

いずみって、ストレスとか疲れが溜まると、いつもこうなんですよ。

なんて、いうのかしら……エッチな気持ちになっちゃうんです。今日のいずみはとっても、悪い子になってしまっ予感がします。

案の定、予感は的中のようです。

いずみはシャワーを浴びているのいるんですけど、水圧が体にかかる度を感じてしまします。

電気が走るっていうのか、胸にシャワーの水圧がかかる度に……

でも……でも今日はダメ、ダメなんです。

我慢しないと、真治君のために剃毛の練習しないといけないですから……

シャワーは感じすぎてしまうので、湯船のお湯を使って体を洗うことにします。

だって、さつきシャワーの水圧がかかった胸なんか、乳首がびんびんに起ってしまっていますし、頭がもやもやしちゃってダメなんですよ。

シャワーを使うのをやめて正解でした。

いずみの淫らな気持ちも、しばらくしたらおさまりました。

今は、湯船に浸かってリラックスしてます。

でも、やっぱり、真治君のこと考えてしまうのですよね。

今日、病室でのバイタルチェックの時に、少しの間だったけど真治君との会話楽しかったです。

真治君、相変わらず、かつこよかったです。

いずみってダメダメですよ。いずみはナースになったのだから、患者さんに特別な感情持ったらいけないのですよね。いろいろなことで、考えていたらのぼせてきちゃいました。そろそろお風呂から上がって練習しないといけませんね。

脱衣場で新しい下着にはきかえてから、いずみはリビングに戻りました。

さてと、今から剃毛の練習です。

化粧台から手鏡を持ってきました。

いずみは、ソファの脚にもたれかかって、パンティーを脱ぎました。真下には新聞紙をひいています。

テーブルの上から、サララップでコーティングした少し小さめ

のバナナを手元に持ってきます。

ちよつと、痛いかな…… バナナを男性の大事な部分に見立てようといずみは思っています。

だって、そうしないと、明日の実践の練習にならないでしょうから…… だってバナナは障害物ですから。

ゆっくりと、いずみは、バナナをいずみのもう一つのお口に入れます。

でも、やっぱり…… いきなりは痛いです。

いずみは、真治君のことを集中して考えることにしました。

そしたら、そしたら、きっとバナナはお口にすんなりと思っただけです。

つづく。

いずみは悪い子なんです。

コンビ二でバナナを買ったのも…… きつと最初から……

考えていたのだと思います。

いずみのもう一つのお口は、おちよぼ口なんです。だから、いくら小さなバナナだといっても、すんなりとは入ってくれないんです。だから、いったんお口に含ませるのはやめました。もっと、もっと、妄想をふくらませてからでないと…… 無理っばいです。

いずみの頭の中は、とても人に話せないぐらいのエッチな妄想が広がっています。

真治君とキスしてるいずみ。

真治君に白衣を脱がされるいずみ。

どんどん、どんどん、いずみの妄想はエスカレートしていきます。そのたびに、自然と、いずみの手は自分の体を弄ってしまうのですよ。

いつのまにか、ブラジャーまで外してしまっていて、生まれたままの姿になっています。

いずみの指は、いつのまにか真治君の男っばい太い指に変わっています。

真治君の手がいずみの胸をもて遊びます。指が胸のぽっちを摘みできます。

体が敏感になりすぎてしまっているの…… 凄く感じてしまうのですよ。

声がでちゃいそうなんです。

ああ、いずみはいけない子です。

いずみの頭の中は、更なる刺激を求めてしまっています。

もう、もう、胸だけでは満足できない自分がいます。

次第に、真治君の手が、もう一つのお口に迫ってきています。
ダメ、ダメです。

真治君の指が器用に、いずみのお口の上の突起物を刺激し始めています。

いずみの頭の中は、更なるエッチな妄想を生み出してきます。

お互いの体の向きが反対になって——刺激しあっているんです。

現実世界のいずみは、右手でバナナをお口にふくませようとしています。

あれほど、お口に入らなかった小さなバナナが、今では美味しそうな音を立てて、啜えこんでいきます。

そして、小さいバナナでは満足できなかったお口が、大きめなバナナを頂戴といずみにせがんできます。

こんなに、大きなバナナは食べられないよと言っても、聞いてくれそうにありませんでした。

バナナはいずみのお口の中で、少し苦しそうに上下に出し入れされはじめちゃいました。

くちやくちやと美味しそうな音をたてて……

いずみの手、いや真治君の手は、少しずつ、バナナの出し入れを早めていきます。

もう、いずみの頭は真っ白なんです。

ずっと、押し殺していた声がもれちゃいます。

そして、いずみは…… 激しい電流が体にはしったような感じになって……

今は、激しい罪悪感にいずみはさいなまれています。

自分の感情が抑えられなかった事に関する自己嫌悪もひどいです。

妄想の真治君は少し乱暴でした。

バナナを激しく食べている時は感じなかったのですが、今は無理に食べたために、少し痛いです。

手鏡で確認してみると、お口はヒクヒクと少し痙攣していました。

いずみは、もう一度お風呂に入ることにしました。

最初に入ったときと違って、シャワーを浴びても何も感じません。いずみって、げんきなものです。

さっきまでは、物凄く体が敏感に反応してたってゆうのに。

湯船に浸かりながら、反省ですよ。

たとえ、いずみの妄想だとしても、真治君を勝手にいずみの思うようにしてしまっただからです。

残ったのは、罪悪感と脱力感だけなんです。よ。

元々、体は疲れていたのですけど、なんだか精神まで疲れはててしまいました。

お風呂から、上がると今日二度目の下着にはきかえました。

また、洗濯するときに、思い出してしまっただろうなあ。そんなことを考えながら、洗濯機の中に下着を放り込みました。

再び、リビングに戻りたいいずみは、気分を落ち着ける為に紅茶をいれました。

紅茶を飲みながら、明日のことを考えます。

気分的には、もう何もする気がおこらないのですが、やはり明日のことを考えると、練習をしないとほづがよさそうです。今度は、障害物のバナナ無しで剃毛の練習しようと思います。

再度、いずみは下着を脱ぎました。左手に手鏡をもって、シェーブの泡をヘアーにかけます。

お風呂にはいったところなので、ヘアーは逆立っていて剃りやすいはず。ただ気を使わないといけないのは、剃刀なんです。刃先は絶対に剃ってる最中に布等で拭いたらだめなんです。刃がこぼれたり、切れ味が悪くなってしまうのです。

いずみは少しづつ、ヘアーを剃りはじめました。大事なところなので、慎重に、慎重にです。

紅茶を飲んで気分も落ち着いていたので、手が震えることもなく順調に剃れていきます。

10分ほどで、いずみのヘアーはつるつるになりました。剃ったあとのお口は、さきほどよりも、よりグロテスクに見えました。

「店長、店長。面接の女の子がきているんですけど…… 今、面接してもらえますか？」

つづく。

第六話 いずみとザマス病院長（前書き）

新キャラ登場ザンス。病院長は嫌らしく仕上げたザンス。

第六話 いずみとザマス病院長

池袋、道玄坂にある青葉台総合病院は、朝からひっきりなしに下半身に悩みを持つ男性患者が、自らの欲望を満たすために、病院に入院している。病院といっても、厚生省から正式に認可されている医療施設などではないために、保険証を持参しても、医療費が安くなるわけでは無かった。男性患者の大半は、保険証の替わりに、雑誌から切り取った割引クーポンを片手に持ち病院に入院していく。入院していく患者は男性ばかりで、スーツ姿のサラリーマンやラフなジャージ姿のお兄ちゃん、杖をついたおじいちゃんと様々な世代の男達がある目的の為に病院に入っていくのであった。

そんな中、プラダのバッグに真新しい履歴書を忍ばせた若い女性が病院に入っていく。女性のいでたちは、春めいたロマンテックレースのワンピースに身をつつみ、女性の小顔にあったニュアンスストレートの髪型がナチュラルな雰囲気をかもし出していた。パット見た感じはどこかの、ご令嬢かといったところだろうか。

女性が病院に入ると、すぐに、会計受付カウンターから白衣を着た男性看護師が威勢よく、

「いらつしゃいませ」と声を弾ませて女性に声をかけた。

すぐに、男性看護師は女性に声をかけたことに気づき、「ああ、面接ですね」と言い直した。

男性看護師の後方には、女性看護師のパネルがところ狭しとはられていて、パネルの中央には今月の指名ナンバーワン！ ナース翔子ちゃんと書かれて張り出されている。

女性が受付カウンターの派手さに驚いていると、男性看護師が再び女性に声をかける。

「驚かなくていいですよ！　すぐに慣れますからね。それじゃ、店長、いや病院長に面接してもらいましょう」

看護師は女性の腕を躊躇なく掴むと、女性を引っ張るように、病

院長の待つ事務室、いや院長室に連れていった。途中、診察を待つ患者の待合室を通っていったのだが、患者達が女性を見る目がとも、ギラギラしていて、女性は早く通りすぎたい衝動にかられたのだった。患者達のいる待合室を抜けると、細長い廊下があり、その左右には病室が設置されている。廊下を突き進んだところに、院長室があった。

看護師が院長室のドアをノックしながら、中にいる院長に声をかけた。

「店長、店長。面接の女の子がきましたよ！」

院長室の中から甲高い声がした。

「入っていいザマスよ」

看護師が女性と一緒に室内に入ると、白衣に不釣り合いな蝶ネクタイをした院長が笑顔で椅子に座っていた。

「おい、西山、店長と呼ぶでないザマスよ！ 院長と呼ぶでザマス」いきなり、院長に注意された看護師の西山は、もごもごしながら、「申し訳ありません、院長。つい以前の癖が……」と頭をかきながら、院長に詫びた。

「わかったら、いいザマスよ。お前は受付に戻ってよし」

院長に戻っていいと言われた西山は、「失礼しました」と言っ
て院長室から頭を下げて出て行った。

院長は軽く、女性の体を舐めるように一瞥すると話をきりだした。

「履歴書持ってきたザマスか？」

女性が院長に履歴書を手渡すと、院長は履歴書に目を通しながら、話を続けた。

「はつきりいって、履歴書はあんまり関係ないザンスよ。この仕事は見た目のザンス。それとやる気ザンス。履歴書は年齢確認程度ザンスね」

院長は履歴書の記載事項を一通り見ると続ける。

「ほほう、大学生ザンスか、若いザンスね。名前が南田由紀子ちゃ

んか、かわいい名前ザンスね。でも、うちじゃ、本名はいらないザンスよ、院長が由紀子ちゃんに源氏名をつけるザンス、で、由紀子ちゃんは、お金稼ぎたいザンスね！」

「はい、ちよつと、いろいろ事情がありまして……」

女性がいいにくそうに、そう答えると、すぐに院長は言った。

「稼ぎたい理由は言わなくていいザンスよ。とにかく稼ぎたいという意思さえ確認できればこっちはいいザンスから。うちは、やる気さえあれば、日当五万以上は保証するザンスよ。でも、少々、仕事はきついザンスよ、がんばれるザンスか？」

女性は日当五万以上という院長の言った言葉に少し興奮していた。そして……

「はい、がんばりますので、働かせてください」

「決まりザンスね、合格ザンス。で、由紀子ちゃんは、この業界初めてザンスか？」

「はい、初めてなんです。高給バイト情報誌でここ見つけて、仕事内容とか、よくわからないです」

院長は素人だとゆうことが分かると、ますます甲高い声になった。「いい、ザンスね。仕事内容は明日にもレクチャするザンス。明日また、ここに来れるザンスか？」

「はい、今日と同じ時間くらいでいいでしょうか？」

女性が、か細い声でそう言うのと、

「じゃ、明日同じ時間に来るザンスよ。あ、そうそう、名刺渡しとくザンス、申し遅れたザンスが、あたし、

この病院の院長で巫女刷半造って名前ザンス、よろしくザンス」

女性は名刺を受け取ると、「こちらこそ、よろしく願います」と院長に頭を下げた。

「それと、その名刺に書かれているアドレスに帰ってから、PCでも携帯でもいいのでアクセスしてくれザンスよ。この病院のことがよくわかるザンスから、それと、由紀子ちゃんは明日からは、いずみって名前になるザンスからね！ 明日からは、いずみってゆうナ

ースになつてもらうザンス、いずみの事も書いてあるザンスから、よく読んでそのキャラになりきるザンスよ。最後に読んだらわかるけど、明日までに、由紀子ちゃんは、自分のアンダーヘヤー剃ってくるザンスよ。それじゃ、今日は帰っていいザンス」

女性は、院長の言つてることが、今一よくわからなかったが、とりあえず、今日は帰ることにした。

もう一度、ドアの前で頭を下げると、院長室を後にして病院から出ていった。

院長室に一人になつた院長はニヤニヤしながら、独り言をつぶやいた。

「明日はゆっくり、レクチャーしてやるよ、いずみたん！」

院長の股間が少し膨らんだ瞬間だった。

つづく。

第七話 いずみとサーモンピンク色の夢（前編）

いずみ……寝れないんです。

さつきからベッドの中でもぞもぞ寝返りばかりかしてるんです。

もう、羊を数えるのも七百近くなって……バカらしくなってやめちゃいました。

寝ないと明日、辛いんだからと思うたびに目が冴えてしまってます。枕元にある目覚まし時計の針は午前二時をさしていて、いずみをあせらせます。

寝れないわけは自分でもわかってるのですけど……

いえいえ、さつき剃ったお口の周りがヒリヒリするとかじゃないんです。

バナナを使ってエッチなことをしてしまった罪悪感からでもないです。

いずみが寝れないわけは、やっぱり明日の術前準備のことなんですよね。

それで、その事を考えちゃうと、いずみの頭の中は、とても恥ずかしい妄想が広がってしまうのですよ。

目をつぶって、寝よう、寝ようとする、いずみの脳内は病室での真治君との秘め事がセリフ付きで映像化されちゃうんです。しかも、妄想なので、いずみにとって都合のいいエッチなものになっていくんです。

いずみの都合のいい妄想は、真治君と病室で二人きりなんです。それで、いずみは二人きりの病室で術前準備の剃毛を始めちゃうのですよ。

真治君のパジャマのズボンをずらして…… 真治君の下半身があらわになっています。

下腹部のヘアーに蒸しタオルをのせます。

真治君のヘアーはけっこう毛深かったりします。

タオルで逆立たせたヘアーに毛剃りクリームをかけて剃毛準備完了です。

いずみは医療用の薄手のゴム手袋をはめて、剃刀を右手に持ちます。

「いずみ、間違っても斬らないでくれよ！」

真治君は心配そうな表情でいずみに言っています。

「うん、大丈夫だよ、真治君。いずみも昨日、練習したから……」

真治君は驚いた表情をして、「練習って？ 自分の毛剃ったの？」と、聞いてきます。

いずみは「うん、剃った」とだけ真治君に言いました。

「じゃ、真治君、始めるね」

いずみは、剃り易いように、左手で真治君の分身を持ちます。

真治君の分身は糞虫みたいっていうか、なんだろう、うーん？

例えるならモスラの幼虫みたいなんです。

最初は順調に剃れていたんですよ。

でも、いずみのイヤラシイ妄想は…… 何もない、なんてこと許してくれないのです。

「いずみの手って、なんだか生暖かくて、気持ちいい！」

その言葉をかわきりに、真治君の糞虫、いやモスラの幼虫は、成虫になるうと……

どんどん、どんどん大きく成長する真治君の幼虫。

気がついた時には、真治君のは、下腹部に反りかえっています。

成虫になった真治君の分身は、大きいのですよ！

やっぱり、いずみは悪い子なんです。

悩んでいるといっても、頭の中は結局こうなることを求めているのです。

そして、妄想内のいずみは、大胆になっていくのです。

「真治君、こんなに大きくなってしまつて…… 手術に支障をきたすかも知れないので……」

「何かするの？ いずみ」

「うん、もっと気持ちいいこと…… してあ・げ・る」

いずみは、真治君の成虫を上下に擦り初めています。

でも、男の人のを擦るのは初めてなので、どれくらいの力でしたらいいのかわからないのです。

「どう、真治君。気持ちいい？」って聞いてみちゃいます。

「うん、気持ちいいけど…… いずみ、素手で擦ってくれよ！」

いずみの妄想の真治君も、エッチになってきました。

「素手の方が、もっと気持ちよくなれるんだよ！ それと、もっと早く擦ってくれ」

いずみは、真治君の要望にこたえるべく、手袋をはずしました。

そして、素手で再び擦り始めます。さっきよりも、早く強い力で……

手袋をしていた時は分からなかったのですが、真治君の分身は又ルヌルしています。

成虫の頭の部分から、半透明の液体が出ているのが原因のようなんですよ。

真治君の顔を見ると、目をつぶっていて「気持ちいい」って言っています。

でも、こんなに激しく擦って痛くないのかな？ いずみは少々、不安なんです。

「真治君、痛くない？ 大丈夫？」

「うん、痛くないけど、それよりも、お願いがあるんだよ！」

何なんでしょう？ お願いって……

真治君の成虫は、くちやくちやとイヤラシイ音をたてているっていうのに。

「お願いってなあに？ 真治君」

いずみは、わかっていますよ。真治君の願いが何なのか！でも、わざと甘ったるい声で聞くのですよ。

「うん、いずみ。同級生のよしみで、よしみでなあ……」
口でしてくれないか！」

「どうしようっかな？ 真治君はいずみのこと……好き？」

いずみは、ほんと悪い子なんです。この局面で聞いちゃいますよ。真治君は、興奮した口調で言ってくれました。

「好きだよ、いずみのこと大好きだよ！ だから……早く……」
口でしてくれよ！」

つづく。

第八話 いずみとサーモンピンク色の夢（後編）

真治君の口から、いずみの待ち焦がれていた言葉「いずみのこと……大好きだよ！」

が、ついに聞けました。

でも、それは…… あくまでも、いずみの妄想でのお話なんですよ。

でも、いいんです。いずみが嬉しいことにはかわりないのですから。

いずみは、真治君の分身である、成虫を喰えることにしました。もちろん、初めての体験なんですよ。

でも、どうやったらいいのか、今一わからないですよ。

とりあえず、成虫の頭を口に入れて見ました。

食べ物じゃないので、どうしていいのか、正直わからないですよ。

「痛あ、痛いよ、いずみ」

真治君が突然、悲鳴をあげました。

「いずみ、歯をたてたらダメじゃんか！　もしかして、いずみ始めてなのか？」

初めてかって、真治君、初めてにきまってるよ。

「ごめんね、真治君、いずみしたことないから……」

真治君は寝ていたベッドから起きだしてあぐらをかきました。

「いずみ、教えてあげるよ！　やり方……　最初はね、いきなり、口の中に入れないで、舌先で、頭の部分をぺロぺロするんだよ。ほら、やってみて」

いずみは、真治君の分身の頭を舌先で転がせてみます。

「うう、そうそう、うまいじゃんか、いずみ。で、今度は頭の裏側の筋を舐めてくれよ」

いずみは、真治君の指示に従って、舌先を転がします。

「いずみ、今度は、啞えてみて——齒をたてないように気をつけて」「うん、わかったよ、真治君」

いずみは慎重に成虫の頭を口に含みます。なんだか、口の中は違和感でいっぱいなんです。

「そうそう、いずみい、気持ちいいよ！ 上下に口を動かして、最初ゆっくりだよ」

いずみは真治君の言われるままに行為をします。

「いずみのかわいい顔をよく見せて、そしたら…… もっと興奮するから」

真治君はあぐらをかきながら、寝そべって真治君の分身を舐めているいずみの顔をまじまじと見つめています。とっても、恥ずかしい気分です。

しばらく、いずみの表情を観察していた真治君は、満足したのか、またベッドに横になりました。

「いずみ、上手だよ！ 凄く感じるよ」

さつきから、真治君はいずみの行為を褒めてくれます。

いずみも一生懸命に齒をたてないように、真治君にご奉仕します。

「なあ、いずみ。いずみのも…… してあげるよ」

真治君の口調から、かなり興奮しているのが感じとれます。

「さあ、いずみ、早く…… こっちに体をむけて……」

いずみは、移動するために、口から真治君の分身を出しました。

真治君の分身は、激しくバネみたいに弾けます。あわわ、凄すぎます。

真治君は、いずみの小さなお口を……

いずみも真治君のを……

お互い夢中になっています。

「いずみ、もっと、音をたててしてくれよ！」

真治君は、いずみに恥ずかしいことばかり要求してきます。

「いずみのお口は小さいなあ。もっと広げていいかい？」

「ダメえよ、真治君、いずみ、恥ずかしいよ」

「だって、俺もつと、いずみの恥ずかしいところ見てみたいんだよ」
真治君は、イヤラシイ音をたてて、いずみのお口のあちこちを舐めまです。

「汚いから、もうやめて、真治君」

真治君はいずみの言ってることなんか、聞いてくれません。
そして、指でいずみのお口を広げてしまいました。

「うわぁ、いずみの綺麗だよ。サーモンピンク色してるよ!」

いずみは、恥ずかしさと、気持ちよさで頭が真っ白になってきました。

頭の中で警告音がなってるようです。

「なぁ、いずみ、俺もつ我慢できないよ! 入れていいかい?」

え、入れるって何を…… ダメ、ダメ、真治君それだけは……
でも、いずみは真治君に言っていました。

「うん、いいよ。優しくして……」

その時でした。いずみの耳元で激しいアラームの音がしています。
うるさいなぁ、せつかくいいところなのに。

いずみが音のなってる目覚ましを止めた時には、もう真治君はいなくなっていました。

夢だったのです。

とつても、とつても恥ずかしい夢です。

おかげで、朝から下着をはき替えないといけなくなっちゃいました。
た。

深夜から明け方にかけて、男は白衣に蝶ネクタイという、不釣合いな格好で机の上にあるノートPCのキーボードを叩き続けた。
男の目は長時間PCに向かい合っていた為に目は充血している。

事務所風の室内には、アルバイトのシフト表が壁に張られている。

部屋の中央には、事務所には似つかわしくないダブルベッドが置かれている。室内の壁には収納用のクローゼットが所せましと置かれていて、白やピンク色の女性看護師の白衣がかけられていた。

男はPCを使つての作業が終わつたのか、深いため息をついた。

男は満足気にPCの液晶画面を確認して、独り言をつぶやいた。

「出来たでザンス、結構ギリギリでいい感じザンス。読み返して見るとエロイザンスね、これで、益々、店が繁盛するザンス。さてと、そろそろ仮眠でも取るザンスか。起きたら……　いずみたんが出勤してくるザンス」

そうして、男は部屋の中央にあるダブルベッドに横たわって、しばしの仮眠を楽しむのであった。

つづく。

第九話 いずみといずみキャラ

ナース専門コスプレファッションヘルス青葉台総合病院の朝は早い。

そして、このヘルスのオーナーでもある巫女刷半蔵院長の朝も当然のごとく早いのである。

巫女刷の経営するヘルス青葉台病院は朝の六時からオープンする。朝の六時から九時までの間は、早朝割引診察タイムとなっており、通常の料金より三千円値引きされるため、出勤前のサラリーマン達にはうけがよかった。その開店準備の為に巫女刷院長の朝は早いのである。

巫女刷と従業員の西山が開店準備をしていると、次々にサービス嬢、いや、ここではエンジェルと呼ばれているナースもどきが出勤してくる。

出勤してくるナース達はどの娘も美人揃いで、流石にこの界限では知らない人がいないほどの人気店ということが窺い知れた。また、出勤してくるナース達はどの娘もとても明るい。院長の顔を見ると、笑顔で元気よく巫女刷にあいさつしていく。

「院長さん、おはようござーまーす」

ナース達が明るいには理由があつて、この店の給金は他の競合するヘルスに比べると格段にいいからである。それは、一重に巫女刷院長の経営手腕の賜物であることは、ナース達の知るところであった。

巫女刷の店は、開店すると同時に、ナース達を指名するための予約電話がひっきりなしに鳴ってくる。患者達の多くは…… いや、欲望で下半身がもやもやしている客達は事前にPCや携帯端末などでヘルス青葉台のHPを確認していて、自分のお目当てのナース達がいっ、何時に出勤しているか確認して電話してくるのである。そ

のために青葉台の待合室は午前九時ともなれば、順番待ちの客達で溢れかえるのが常であつた。

人気のナースともなれば、客達は二時間でも三時間でも待合室で待っている。そんな客達を飽きさせないために待合室にはネットカフェばりの設備が搭載されていた。無料の飲み物バー、インターネットに電動マツサージチェア、風俗雑誌をはじめとする読み物やアダルトDVDなどなど。客達にとってはいたれつくせりで、多少、他店よりサービス料金が高くても客達は青葉台に足を運んでくれるのであつた。

客達は、お気に入りのナースの順番がくるまで外出することも出来るのだが、外に出るより待合室にいるほうが楽しめるので、ほとんど外出するものはいなかった。それと、待合室にはナースアルバムなるものがあり、客達の目を楽しませてくれるのであつた。

ナースアルバムは文字通り、この店に在籍しているナース達の情報が写真入りで掲載されており、現在どのナースが一番人気だとか、得意なサービス、ナースのスリーサイズなど、こと細かに書かれており、客達は食い入るように欲望の眼差しでアルバムを見る。青葉台はナースの在籍人数が八十名もいるので、全部確認するだけでかなりの時間がかかってしまうのだが、たいていは見ているうちに従業員にナース達の待つ部屋に案内されることが多いのであつた。

巫女刷は事務所兼院長室でナースアルバムを手にとってニヤニヤしていた。

アルバムのトップページには新人ナースいずみちゃんと、ピンク色の字体が踊っていて、まだナースの写真は貼られていない。

「いずみたん、今日出勤してきたら、デジカメで撮影して早速貼るザンス」

巫女刷はそう独り言をいうと、おもむろに壁にかかつてる時計に目をやった。

「いずみたん、遅いザンスね」

時計の針は十時を少しまわったところを指していた。

巫女刷がインターホンでいずみが出勤してきたか確認しようとした時に、従業員が院長室のドアをノックしてきた。

「院長、昨日面接にこられた方がお見えになりました」

「入ってもらうザンス」

巫女刷は裏返った声で従業員に言った。

従業員に押されるような形で、いずみこと南田由紀子が院長室に恥ずかしそうに入ってきた。

「おはようございます、遅れてもうしわけございません」

由紀子は緊張した面持ちで巫女刷に謝った。

「おおお、いいザンス、気にしないでいいザンスよ。来ないのじゃないかと心配していたザンスよ」

巫女刷はわざと明るく、由希子に言った。巫女刷は由希子が金になる木だと充分に理解している。

「今日来てくれたってことは働く気になってくれたザンスね。面接して、次の日来ない女の子けっこう多いザンスよ」

「はい、昨日一日悩んだんですけど…… いずみ、やっぱりお金欲しいのですよ」

少々照れ臭そうに、由希子がいずみのキャラ風に言ってくれたので、巫女刷は満面の笑みになった。

「いい、実にいいザンス！ いずみさんのブログ読んでくれたザンスね。どう？ いずみたんいいキャラしてるザンシヨ」

「はい、バカっぽいけど、ドジなところとか、私に似てる部分もあるの——がんばってみます」

巫女刷は嬉しそうにうんうんと頷いた。

「その意気ザンスよ。いずみさんはこの業界初めてザンスから、ワザとドジで不器用な設定にしたザンスよ。それだったら客もある程度納得してくれるザンスからね。けっこう考えて書いてるザンスよ」

巫女刷は自慢気に続けた。

「で…… 今から早速サービスの練習してもらおうザンス。客は勿論、

私ザンス。でも、いずみたん初めてなので、右も左も分からないと思うザンスから、先輩ナースの翔子たんに見本を見せてもらうザンス」

巫女刷は、さつきから突っ立てるだけの従業員に言った。

「翔子さんの予約確認してくるザンスよ、客がつまってるなら、こっちが優先ザンス、早く確認してくるザンス」

従業員は、すぐに翔子ナースの予約確認をしにフロントに戻っていった。

すぐに、院長室のインターホンが鳴った。

「院長、翔子さんは、あと十分ほどで空きますが、予約の客が二人待っています。どうしましょうか？」

「だから、さつき言ったでザンショ。予約の客は待たせて置くザンス。客には適当なこと言って割引サービス券渡してしのぐザンスよ！ 翔子さんの準備が出来たら、こっちにこさせるザンス」

「はい、了解しました」

巫女刷は、少しイライラしたのか、インターホンを乱暴に戻した。「ところで、いずみたんは…… アンダーヘア剃ってきたザンスか？」

巫女刷は、由希子の顔を窺いながら、いやらしい笑みを浮かべて聞いた。

「いずみ、剃毛したことないんです。だから、そのままなんです――まずいですかね」

「それは、まずいザンスよ！ 一応いずみたんの設定はパイパンザンスから…… でも、気にすることないザンスよ！ 今から、私と翔子たんとで、いずみたんのあそこ…… 綺麗に剃ってあげるザンス」

つつく。

第十話 いずみと翔子先輩

巫女刷は嬉しくてしかたがなかった。

なぜなら、今から実技練習と称して、いずみこと由紀子の体をもて遊ぶことが出来ることにほかならないからである。それと、久々にヘルス青葉台総合病院でのナンバーワンナースである、翔子エンジェルのサービスを受けれるのも巫女刷のテンションを上げてくれていた。

「それじゃ、いずみたん。翔子たんを待つてるあいだに白衣に着替えるザンス」

巫女刷はクローゼットから真新しい白衣を取り出すといずみに手渡した。

「えっ、院長ここで着替えるのですか？」

「そうザンスよ！ 何恥ずかしがってるザンスか、今からもつと恥ずかしいことするザンスよ」

いずみは、少々戸惑いながらも、院長の巫女刷にせかされる形で着ている服を脱ぎはじめていった。

巫女刷は服を脱ぐ、いずみの体をまじまじと舐めるような目で観察している。

「いずみたんは色白ザンスね。肌も見た感じ張りがあっていい感じで…… おいしそうザンス」

いずみは着ている春色のワンピースを脱ぐと下着だけになっていった。

それから、白衣を着ようとするいずみに対して、院長はそのままと手で合図すると、机の引き出しから、デジカメを取り出した。

「アルバムに使う写真を撮るザンス」

巫女刷は、いずみにブラジャーを外すように指示した。

なかなか、緊張のあまり、うまくブラのホックがはずせない新米ナースいずみ。

「ほんと、不器用ザンスね。いずみたん！」

巫女刷はいずみの後方に周ると、いずみのブラのホックに手をかけた。

簡単にブラが外されて、いずみの形のいい胸が露わになる。

巫女刷は後ろから、バストの弾力を楽しむかのように軽く胸を揉んだ。

「軟らかいおっぱいザンス」

数回、いずみの胸の感触を楽しんだ巫女刷は、興奮した口調で院長室のベッドに正座するよういずみに言った。

ちよこんと、大きめのベッドの中央にいずみは正座した。

「胸は手で隠していいザンスよ。それじゃ、いずみたん笑ってザンス」

巫女刷はデジカメでいずみの上半身をフレームにおさめると数回シャッターのボタンを押した。

「いずみたん、今度は四つんばいになって挑発的なポーズを撮るザンスよ！」

巫女刷は、いずみにいろいろとやらしいポーズを撮らせて写真撮影を楽しむ。

調子に乗った巫女刷は、いずみにパンティーも脱ぐように指示した。

恥ずかしそうにいずみは、パンティーを脱いだ。

生まれたままの姿になったいずみに対して巫女刷は、更に恥辱的なポーズをとるように言う。

「いずみたん、もっとお尻を突き上げて！ おしっこするように座って！ M字開脚して両手でよく見えるように広げて……」

本来なら、ここまで恥ずかしい写真はアルバムには使わないのだが、いずみに対してこのような恥ずかしい写真を撮るのは、巫女刷自身のコレクションのためであった。

いつも、巫女刷は採用したエンジェル達に恥ずかしいポーズの写真を撮って、自らのアルバム、決して客に見せることのない巫女刷

専用のアルバムの素材に使うのである。

巫女刷が写真撮影に満足したところに、タイミングよく、人気ナンバーワンエンジェルの翔子が院長室に入ってきた。

翔子ナースはピンク色の看護師のコスチュームを纏っていて、髪は金髪に染めて、とてもまっとうな病院にいるナースには見えない感じである。

入室した翔子はベッドの上ですっばんぼんになっているはずみの姿を見て少し驚いたが、すぐに自分が院長室に呼ばれた理由がわかったみたいである。流石、ナンバーワンだけあって察しがよくて頭の回転も早いのである。

「この娘に仕事の仕方を教えろってわけなのね」

巫女刷と目があつた翔子は開口一番そう言った。

「そういうことザンス」

巫女刷は、いずみに翔子を紹介し始めた。

「この病院の一番人気のナースの翔子たんです。週三日勤務で月に二百万は稼ぐザンス。いずみたんも、翔子たんから、いろいろ盗んで、病院に貢献してくれザンス」

いずみは巫女刷の紹介を聞きながら、翔子に軽く会釈した。

巫女刷は、いずみにこの病院のシステムと稼ぎ方を説明しだした。

巫女刷の話はこうである。

ファッションコスプレ青葉台総合病院の給与システムは完全歩合制で日払いで賃金は支払われる。

がんばれば、がんばるほどお金がたくさん貰えるというもの。但在籍エンジェルの数が多いのとサービスを提供できる部屋数が限られているので毎日勤務することは難しい。だいたい週に二、三回の出勤を目途にして欲しいということ。

青葉台での客からとる料金は六十分、二万円と設定されていて、店はこの料金から二割いただくということ。つまり、エンジェルは一人の客にサービスすると時給一万六千円貰えるということである。

だから、五時間の勤務で運よく客がつけば、日当八万円がエンジェルの手元に入ることになる。サービス料金とは別に指名料金があるが一律千円で、これは全てエンジェル達の取り分になるということだった。

次に、お客に対するエンジェルのサービスなのだが、青葉台では本番（合体）^{ゴムなしフェラ}以外は全てOKとなっている。デープキスはもちろんのこと、生尺、69、口内発射、顔射、指いれ、パイズリ、素股、ローションプレイ、アナル攻め等々、客が希望すればエンジェルは笑顔で受け入れないといけないのだ。

とにかく六十分のプレイタイムの間に、お客を満足させて発射させないといけないということである。

万が一にも、時間内にお客を満足させられない場合（泥酔の客は除く）店はお客に料金を全額返すシステムになっているのである。また、お客から、サービスが悪いなどクレームの多いエンジェルは店を辞めてもらうこともあるとのことだった。

興奮しながら早口で説明した巫女刷は、いずみに質問はないかと聞いた。

「あのお、いずみはあまり男性経験ないんですよ。だから、お客さんを……」

いずみは不安気に巫女刷にそう言った。

「大丈夫ザンス、今から翔子さんに見本を見せてもらうザンスから、いずみたんは隣でよく見ておくザンス、そのあとに、いずみたんにも練習してもらうザンス」

そう言うつと巫女刷は、院長室を出ていった。
しばらくしてから、院長室のインターホンが鳴った。

翔子はインターホンを取る。

インターホンからは巫女刷の声がしていた。

「バイタルチェック入りまーす」

「はい、お願いしまーす」と翔子は言ってインターホンを戻した。

翔子は院長室のドアを開けて、正座しながら、患者（巫女刷）を待った。

つづく。

第十一話 いずみのマル秘レッスン（その一）

巫女刷は満面の笑みをうかべて、ドア前に姿を現した。

すぐに、翔子は巫女刷に一度だけ深々と頭を下げると立ち上がった。

「今日はどうなさいました？」

翔子は巫女刷に白々しくたずねる。

ヘルス青葉台では、お客にリアリティーを感じてもらう為に店の内装をはじめとして、エンジェル達の言葉使いまで病院風にするようにと通達している。

巫女刷は翔子の言ったことを聞いて待つてましたとばかりと返事をした。

「うん。僕たん、ちよつと下腹部に違和感があるみたいでちゅ。悪い毒素が溜まつてるみたいなので見て欲しいでちゅ」

「それじゃ、ちよつと患部を見てみましょうね」

翔子は巫女刷に着ている服を脱ぐように言った。

巫女刷は素っ裸で見ているいずみに、脱衣しながら説明をはじめた。

「ここに来る客は、ほとんどがヘルス青葉台のHPを見てきてるザンス。いずみたんもエンジェルのブログを見て知ってると思うザンスが、それぞれのエンジェルにはキャラ設定がしてあるザンス。例えば、翔子たんはツンデレ風ベテランナースになつてるザンス。いずみたんは、ドジな新人ナースにしているので、楽に接客したらいいザンスよ。いずみたんにつく客は素人感を求めてやってくるザンスから…… 不器用な接客な方が萌えていいザンスよ」

翔子もいずみにアドバイスする。

「接客をする時は、緊張したらダメだからね。キャラ設定といっても曖昧なものだから、適当でいいよ。

肝心なのは、お客さんの緊張をほどいて満足して帰ってもらうこと

なの。だから、いずみは明るく笑顔で接客したらいいと思うよ。そのうちに慣れてきたら、アドリブでいろいろ客との会話もはずんでくるからね」

いずみは、二人のアドバイスをうんうんと頷いて聞いた。

服を全て脱いだ巫女刷の横で、翔子は乱暴に脱ぎ捨てられた衣服を丁寧にあたむ。巫女刷の白衣はハンガーにかけて、下着は籠にたたんで入れた。

それから、翔子は巫女刷の手を握って、院長室に設置されてる簡易シャワーに連れていく。

「患部がよく見えるように洗い流しましょうね」

翔子は、棚にあるプラスチックのコップにイソジンを数滴入れると、蛇口をひねってイソジンを水で薄めると巫女刷に手渡した。院長室は一瞬、消毒液に匂いで包まれた。

「いずみ、必ず、お客さんに口を濯いでもらってね。でないと……わかるでしょう」

巫女刷は、わざといずみに聞こえるようにガラガラと音をたててうがいをした。

翔子はうがいをしている巫女刷を尻目に、シャワーの温度を確認している。

「いずみ、今から洗い方教えるから、近くにきてちょうだい」

翔子はいずみにシャワーの近くにくるように手招きして呼んだ。

「湯加減どうですか？」

「ちょうど、いいザンス」

翔子は軽くボディソープを巫女刷の体にかけて洗い流す。

「上半身は軽くていいからね。大事なのは下半身のあそこだからね」真横で見ているいずみに、翔子はワンポイントレッスンをする。

いずみは、巫女刷の下半身に目をやった。そして、驚いた。

巫女刷の大事な部分は、いずみが今まで、それなりに見てきたものとは、形状がいささか違っていているのだ。

巫女刷の大事な部分の先端部はデコボコと凹凸がある。

驚いた表情をしているいずみの顔を楽しみながら、巫女刷は自慢気に言った。

「僕たんのはスペシャルに改造してるザンスよ。煩惱の数だけ真珠を埋め込んでいるザンス。これを入れたら、どんな、女の子もヒイヒイよがり狂うザンス」

翔子は巫女刷の真珠入りの先端部にボディソープの液体をすりこんで、上下にこすった。

すぐに、ほのかな香りと共に、泡立つ巫女刷の先端部。

「いずみ、ここは入念に洗わないといけないのよ。院長のは問題ないけど、汚くされてるお客さんもいるからね。私達の仕事をするにあたって一番怖いのは病気なのよ。だから、さり気なく、お客さんのを確認しながら洗ってちょうだい。それと、皮を被ってる方もおられるので、慎重にむいて洗ってあげてね」

翔子は巫女刷の患部を丁寧に洗い流した。

巫女刷の患部は、すでに毒素をはきだそうと、そそり起っている。「だいぶ、悪いようですから。応急処置しましょうね」

巫女刷の患部を見て、翔子は笑いながら言った。

「はい、翔子たん、お願いします」

翔子は巫女刷の体をタオルで拭くと、再び手を握って、ベッドのところに連れていった。

「仰向けに寝てくださいね」

巫女刷はベッドに寝そべった。巫女刷の体の中央部だけがそそり立って目だっていた。

「いずみたん、翔子たんのサービスをよく見ておくザンス」

巫女刷はいずみにそう言うと、目をつぶって翔子のサービスを待った。

「それじゃ、初めますね！ 痛かったら言ってください」

翔子は巫女刷のおでこから、キスを始めた。

キスをしながら、患部を左手で弄る。

すぐに、巫女刷の患部から半透明な液がにじみでてきた。

翔子は巫女刷の唇に口を重ねる。

巫女刷は翔子の口に舌を乱暴に入れる。

キスをしながらも、翔子は巫女刷の患部を上下に擦る。

無音の院長室からは、翔子が患部を擦ってる音が響いていた。

徐々に、翔子の口先は巫女刷の上半身に移動していく。

乳首を翔子の舌先で吸われて、巫女刷は声を荒げている。

「翔子たん、腕を上げたザンス」

「うーん、気持ちいい？」

翔子は甘ったるい声をだして、巫女刷に聞く。

「気持ちいいザンス」

翔子の舌先は、巫女刷のへその辺りを攻め立てる。

そして……

翔子は巫女刷の一番敏感な部分に舌先を這わせた。

目をつぶっていた巫女刷は、患部を舐め始められると、体を少し起こして翔子のサービスを見始める。

「いずみ、お客さんの顔を見ながら、舐めるのよ！ そしたら、お客さんは、興奮して早く逝ってくれるからね。早く、お客さんが昇天してくれた方が仕事が楽だからね！」

翔子の言ったことを聞いて、巫女刷も頷いた。

「そういうことザンスよ。流石ですね翔子たんは…… でも、僕たんは、なかなか昇天しないザンスよ」

それを聞いて、翔子は先端部をチヨロチヨロ舐めるのを止めると、今度は先端部を咥えこんだ。

つづく。

第十二話 いずみのマル秘レッスン（その二）

翔子は、わざとイヤラシイ音をたてて、巫女刷の先端部を上下に口でゆっくりと出し入れた。

翔子は、お口で巫女刷の真珠を出し入れしながらも、時折、巫女刷の顔を上目使いで見つめる。

翔子は、長年の経験から男性の昇天の仕方を熟知しているのである。わざとイヤラシイ音をだしたり、行為をしている最中に巫女刷の顔を見たりするのも、どうしたら、男性が興奮するかを知ってるかにほかならない。

巫女刷は、離れてたじろぎながら見ているいずみにもっと近づいて観察するように手で合図した。

「どうですか？ いずみたん。近くで見ると生々しくて凄いザンシヨ。しっかり翔子さんの技を盗むザンスよ」

翔子はいずみの目の前でズルズルとうどんでも啜ってるような音をだして、夢中で巫女刷の患部をむさぼっている。翔子は緩急をつけて、上下に顎を振る。

「そんなに早くされたら、逝ってしまうザンス」

翔子は巫女刷の言葉を見逃さない。さらに顎の上下の運動を早めた。

「うう、もうダメ。逝ってしまうザンス、いくう、ザンス」

そうして、巫女刷はピクンと一瞬体を痙攣させると、翔子の口内で果ててしまった。

翔子は、ベッドからティッシュを取ると、巫女刷に見えるように口から白い液体をティッシュに吐き出した。

「たくさん、出たザンス。しかし、翔子さんは、流石に上手いザンスね」

翔子は巫女刷に褒められてまんざらでもない表情をしていた。

「いずみ、これが、私達のお仕事よ。がんばってね」

翔子は啞然としているいずみに言った。

「凄かったです先輩、いずみも早く先輩みたいになれるようにがんばります」

巫女刷は体内から毒素が放出された為か、いささか放心状態でエンジニア達の会話に耳を傾けていた。

翔子はいずみに、「早く先輩みたいになりたい」と言われたことに気をよくしていて、接客方法など翔子の今までの経験からなるテクニクをいずみに教えてやっている。

「そうそう、男なんてみんな、バカだからね。ちよつと演技で喘いでやったら――顎が疲れてきたら、手でしごいてやるのもありよ」

「ありがとうございます。翔子先輩」

巫女刷は、いずみの翔子に対する社交性のあるトークを聞いて、この子を使えると直感した。

それと、同時にいずみに対する邪まな思いもこみ上げてきた。

（これから、指導と称して合体してやるザマス）

「翔子たん、お疲れ様ザマス。いずみたんも、だいだいの流れがわかったみたいなので、もう戻っていいザマス。今日の指導料は後で日払い時に、西山に請求してくださいザマス。気持ちよかったので特別に多くわたすように、西山にはいつておくので……」

翔子は巫女刷の追い出すような口調から、だいたいの察しがついたので、院長室からそそくさと退室していった。

巫女刷は院長室に備え付けてある冷蔵庫から、精力増強剤を取り出すと一気に飲み干した。

「それじゃ、だいたいのサービスの仕方分かったと思うザマスから、やってみようかいずみたん」

「はい、お願いします。院長先生」

そうして、巫女刷の実技指導と称する自らの性欲を満たす行為が始まった。

慣れない手つきで、巫女刷の分身を洗ういずみ。

「そうそう、ちゃんと付け根もキレイに洗うザンス」

先ほど、翔子によって毒素を吐き出したにも関わらず、巫女刷の分身は元気に反りかえっていた。

巫女刷はわざと仁王立ちになって分身をいずみに見せ付ける。

「どう、ザンスか？ 大きいザンシヨ！」

いずみは困惑した表情で「はい」とだけ返事した。

巫女刷は、タオルで体を拭いているいずみに対して、興奮した口調で言った。

「ベッドに行くザンス」

巫女刷は強引にいずみの手を引っ張ってベッドに連れていった。

「いずみたんは、まだ慣れてないので、僕たんがリードしてあげるザンス」

巫女刷はいずみにベッドの上に体育座りするように指示すると、後ろにまわっていずみの形のいい胸の感触を楽しんだ。

「柔らかいおっぱいザンスね。いずみたんは敏感ザンス、もうこんなに乳首が起ってるザンスよ」

巫女刷は慣れた手つきで巧みに、いずみの胸をもて遊んだ。

思わず声が出てしまういずみ。

「いずみたんも、興奮してきたみたいザンスね！ もっと気持ちいいことしてあげるザンス」

巫女刷は、いずみに横になるように言った。

院長室は、巫女刷がいずみの体を舐めまわす音が響く。

「いずみたん、今度はお尻を突き上げて、よく見せるザンスよ」

巫女刷は、いずみにイヤラシイ格好をさせて、いずみの体を持って遊んだ。

「思っていた以上に、下のお口は小さくて綺麗ザンスよ。指入れますザンス」

いずみの小さい口に、巫女刷の太い人差し指が出し入れされる。クチャクチャ、プスプスと、いずみの小さい口からは淫らな音が

していた。

「空気の入る音はヤラシイザンス」

巫女刷はそう言って、指を一本から二本に変えて、いずみのお口を攻め立てた。

「どう、いずみたん？ 気持ちいいザンショ！ 今度は僕たんのものをお願いします」

巫女刷は指を抜くと、ベッドに寝そべって、いずみに分身を舐めるように指示した。

「そうそう、上手いザンス。裏側も舌先で……」

いずみは、巫女刷に言われるがままに、分身に奉仕した。

巫女刷は、分身を奉仕されながら、自らの欲望を完結させるためにきりだした。

「ところで、いずみたん、顎疲れるザンショ。こういったことを一日に何人にもしないといけないザンスよ。

だから、ローションを使つてのプレイを伝授させるザンス」

「ローションですか？」

「そう、ローションを使って素股を教えてあげるザンス」

巫女刷は、いずみにお口での奉仕をやめさせると、立ち上がってシャワーのところの小棚からビンを持ってきた。

つづく。

第十三話 いずみのマル秘レッスン（その三）

巫女刷は、小瓶から半透明の粘々した液体を、自らの分身に垂らした。

「さあ、いずみたん！ ローションを引き伸ばすザンス」

巫女刷の指示に従って、いずみは巫女刷と自分の下腹部にローションを塗りこんだ。

「どうザンス？ 冷たい感触で気持ちいいザンショ」

「気持ちいいっていうか、何か不思議な感触です。手もなんだかネバネバしていて――洗ってきていいですか？」

巫女刷はいずみの困惑している姿が可笑しくてたまらなかった。

「いずみたん。洗ったらローションがもったいないザンス。手についているのは、胸に塗るザンスよ」

巫女刷はいずみの手を握ると、いずみについていたローションで胸にまんべんなくローションを塗ってやった。

「ローションは便利なものザンスよ」

巫女刷はベッドに仰向けに寝転んだ。

「さあ、いずみたんのおっぱいで挟むザンス」

巫女刷は自らの反り返ったものを指差すと、胸で挟むように指示した。

「こうですか？ 院長先生」

いずみは、胸をよせて、巫女刷の分身を挟んだ。

「それで、いいザンスよ！ プニプニユシていてたまらないザンス。ローションは肌と肌の摩擦を和らげてくれるので、上手く擦れるザンスよ。上下に挟んで擦るザンス」

いずみは、胸をゆつくりと上下に揺らした。

巫女刷は、すぐに感嘆の声を上げる。

「上手ザンス！ 気持ちいいザンス！！ で、挟んで動かしながら……先端部を舌先で……」

院長室はローションの擦る音といずみが分身を舐めるいやらしい音とが交錯して響き渡っていた。

「いずみたん、もうパイズリはいいザンスよ。このまま、続けられたら……昇天してしまうザンス」

流石の巫女刷も素人の胸の中で果てるわけにはプライドが許さないらしく、いずみに挟んで舐めさせるのをやめさせた。巫女刷は、再度いずみにローションをお互いの下腹部に塗らせた。

「いずみたん、今度は僕たんの上にまたがるザンスよ」

いずみも、だいぶローションの使い方がわかってきていたので、巫女刷の分身にまたがって腰を前後にスライドさせた。

「いずみたんは、理解が早くて賢いザンスね。そうそう、最初はゆっくりとするザンスよ」

いずみは、巫女刷の肩先に両手をついて、腰をスライドさせる。

巫女刷はスライドするたびに揺れる胸を揉みながら、いずみの行為を楽しむ。

（さてと、そろそろ合体してやるザンス）

「ところで、いずみたん。ヘルスで絶対にはいけない事は何かわかるザンスか？」

いずみは、腰をスライドさせながら、答えを考えたがわからなかった。

「……院長先生、やってはいけない事って、わからないです」

巫女刷は、いずみが自分の思っていた通りの返事をしてくれたので満足であった。

そして……

「いずみたん、ヘルスでやってはいけない事とは、こういう事ザマース」

巫女刷は両腕でいずみの背中に手をまわすと、いずみの体にしがみついた。

それから、瞬時に分身の位置を変えると、いずみの下の口に分身をねじ込んだ。

「い、いやあ、やめてください、院長先生」

いずみは、しばしの抵抗を見せたが遅かった。

巫女刷は、しっかりいずみの体を掴んで、腰を上下に振った。

「ヘルス青葉台でのご法度な事とは……僕たんが今してる事なのザマスよ、いずみたん！」

次第に巫女刷の息づかいが荒くなつていくのに比例して、巫女刷の腰を振るスピードが早まっていた。

最初、抵抗を見せていたいずみだったが、腰の上下運動が早まっていくなかに、いずみの口から淫らな喘ぎ声が院長室に木霊した。

「いずみたん、僕たんが思っていた以上に、素晴らしいものをもっているザンス。もう、もう、僕たんは……我慢できないザンス」

巫女刷は、勢いよく分身を抜くといずみの顔に邪まなものをぶちまけた。

実技指導と称する性行為が終わって巫女刷は満足であった。

いずみにシャワーで体を洗わせながら、さきほどの行為を説明しだした。

「ここに来る客の多くは、さきほどのような事を欲しているザンス、だから、言葉巧みに行為を要求してくる客もいるザンス。例えば、金を握らしてくるとかあるザンスよ！でも、絶対にさっきみたいに隙をみせて、本番行為をしたらいけないザンスからね」

いずみは、小さな声で「はい」とだけ返事した。

「それじゃ、今日はお疲れ様ザンス。いずみたんは、もう立派なヘルス青葉台のエンジェルザンスよ」

全てのレッスンが終わって、帰ろうとするいずみに巫女刷はそう言った。

「はい、院長先生、来週から、よろしくお願いします」

いずみは、巫女刷から、本日の実技練習をした報酬の封筒をバッグに入れた。

「来週までには、いずみ日記更新しておくザマス。きっと初日から指名客が殺到するから、覚悟しておくザンスよ」

別れ際に巫女刷は、いずみのおでこに軽くキスをして院長室から送りだした。

「さてと、リアリティーをだす為に、いずみ日記を完成させるザマス」

巫女刷はそう独りごとを言うと、パソコンの置いてある机の椅子に座った。

つづく。

最終話 ナースのマル秘お仕事

いずみの病院に行く足どりは、もの凄く重いんですよ。

昨晚淫らなことをしてしまった罪悪感があったりしますし、剃ってしまったところがヒリヒリしたりなんかもしています。でも、やつぱり肩からずっしりくる重さは、今日行われる真治君の手術の为什么呢。そうですね。

ふだんなら、十分ほどの職場までの距離が何倍にも感じてしまいます。

ヘルス青葉台の院長室で、巫女刷は頭を抱えていた。

「うう、このままでは、いずみちゃんの出勤日までにブログが完成しないザンス、昨日書いとけばよかったけど、忙しくて書けなかったザンス」

巫女刷の悩みの種は、客寄せの為に書いているナースのマル秘お仕事日記なるものであった。先週から、いずみという名の新人ナースのブログ風小説もどきを書いているのだが、あまりに恋愛要素を取り入れてしまった為に、話の終わりが見えないでいるのだ。しかも、明日からは、先日面接して実技指導までした新人エンジェルの初出勤日なのである。時間的に考えて、本日まで話を終わらせないといけない状況であった。

「こうなったら、多少強引でも話の展開をすすめて終わらせるしかないザンス」

巫女刷はぶつぶつと、PCのモニターに向かってそう呟くと、再びキーボードを叩き始めた。

いずみは病院について、仕事を始めても、まだボツトしちゃっています。

カンファレンスもいい加減に聞いていたのがばれてしまって、婦

長さんに大目玉でした。

その後も、ミスの連発でして、翔子先輩からも「いずみ、体調悪いの？」って聞かれる始末なんですよ。

そんなこなしているうちに、いずみにとっては、運命の術前準備の時間になってしまいました。

真治君の病室に行くと、剃毛をする為に、個室の準備室にお連れしました。

すぐに、剃毛の準備をして、真治君の毛を剃り始めたのですけど

……

いずみはやらかしてしまいました。

何をつて？ それは、昨晚の淫らな夢が現実になんです。ドリーム・カム・トゥーってやつなんですよ。

気がつくと、いずみは婦長さんと対話してました。

「どうして、ああいう事になってしまうの？」

婦長さんは、カンカンでした。この怒りようから、今までの始末書レベルでないことが、バカないずみでも感じ取れました。そうして、婦長さんの口から衝撃の一言が……

「患者さんと関係を持ったナースは、この病院においておけません。ですから、早急に辞表を書いて自主退職してちょうだい」

いずみは、次の日には退職届けを婦長さんに手渡していました。

子供の時からの夢であったナースを辞める瞬間でした。

いずみに残ったのは後悔の念と、看護学校の学費免除の特例が無くなったことによる借金でした。

寮も出ていかないといけないので、もうフラフラなんです。あ、それと新しい仕事も探さないと生活ができないのです。とにかく、借金があるので割りのいい仕事を探さないといけないのです。

そんな時、偶然コンビニの高額求人情報誌で割りのいい仕事を見つけたのです。

その、仕事とは……

巫女刷はPCのエンターキーを大袈裟に叩いた。そして大きく手をあげて背伸びを一回した。

「なんとか、間に合ったザンス。多少強引すぎたザンスけど、妄想で股間を大きくしてる客にはちょうどいいザンス」

PCのモニターには、先日、巫女刷がとった写真がいずみ日記なるものに貼られていて、大きな文字で期待の大型新人登場と書かれていた。

「ちよつとの工夫で金なる木の誕生ザンス！ いずみさんは、きつと店に更なる繁栄をもたらしてくれるザンス」

それから、一ヶ月後。

ヘルス青葉台の受付にあるパネルには、当店の一番人気に、いずみの笑顔の写真が飾ってあった。

巫女刷の思惑通りに、いずみはヘルス青葉台の看板娘ならぬ、看板エンジェルになって、大いに店に貢献していた。

巫女刷は、院長室に張つてあるエンジェル達の指名実績を見て満足の表情を浮かべていた。

「いずみさんは、よくがんばって仕事に励んでくれるザンス」

その時、院長室のインターホンが鳴った。

相手は従業員の西山からであった。

「あのお、院長先生。受付に警察の方が来られていて、オーナーに話があると言っています」

西山の声は震えていて、のっぴきならぬ事が起こっていることを知らせるには充分すぎるものだ。

「西山、いないと言って誤魔化しておくザマス」

「でも、院長、警察の奴はすでに……」

院長室のドアが激しくノックされて、外から怒声が聞こえる。

「巫女刷いるのは分かっているぞ！ ドアを蹴破る前に開ける！」

巫女刷には、警察にお世話になる理由がわからなかった。定期的

に地元の刑事には金を握らしていたので、

がさ入れがある時は事前に連絡が入る事になっているはずだった。

巫女刷はドアが壊されるのも嫌なので、素直にドアを開けた。

ドアを開けると、巫女刷の面識のない私服警官が三人たっていた。

その中の一人が逮捕状と書かれた紙を巫女刷の眼前に突きつけた。

「巫女刷半三、風営法違反並びに、未成年者に淫らな行為をさせた容疑で通常逮捕する」

「ちょっと、刑事さん。待ってくださいザンス、うちは真つ当な営業してますし、未成年者も働いていないザンスよ。調べてもらった……」

巫女刷は、激しく反論したが、刑事は巫女刷の腕に手錠をかけて言った。

「この店のいずみ、いや、南田由紀子に本番行為をさせていたのと、由紀子が十七だと知って働かせた容疑だ」

巫女刷は刑事の言葉を聞いてしまったと思った。いずみを面接した時に外見から履歴書の内容を信じてしま

い、免許書等で年齢確認を怠ってしまった。それと、いずみが本番行為をしていたなんて、思ってもいなかった。通りで指名客が新人にも関わらず多いはずだと、手錠をかけられてから思ったのであった。

「言い訳は、署に帰ってから聞いてやる。今度は長くなりそうだな、巫女刷」

巫女刷は、ヘルス青葉台を開店する前にも、同じような内容で逮捕されていて前科があった。その時は初犯ということもあって書類だけで助かったのだが、今度はどうなるかわからない。下手をするとか実刑をくらってしまうかも知れないのであった。その事を考えると、頭が真つ白になる巫女刷であった。

巫女刷の予想通り、巫女刷は執行猶予のつかない実刑が裁判官から言い渡されたのは、逮捕されてから数ヶ月のことだった。ヘルス

青葉台は、巫女刷の逮捕によって閉店の憂き目にあっていた。

しかし、逮捕されても懲りない巫女刷。

巫女刷の腹の中は、模範囚となつて一刻も早く、刑務所から出て新たなヘルスを開業することではいっぱいであった。すでに、次のアイデアは出来ていた。

巫女刷は牢屋で、先輩の囚人のいじめにあいながらも、夜な夜なノートにアイデアを書き込む。

ノートには「逮捕しちゃうぞ！ 新米婦人警官マル秘お仕事」なる日記が書かれていた。

みなさん。こんにちは、あたしの名前は浅井いずみって言います。

子供の時から憧れで夢でもあった婦警になつたばかりなんです。でも、いずみには、悩みごとがあつて、先日交通違反をされた方が——高校時代の先輩で……

おしまい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7283d/>

ナースのマル秘お仕事（エンジェル・ハンドシェイク）

2010年10月8日14時45分発行